

---

# 昨日は終わらない

キララ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

昨日は終わらない

### 【Nコード】

N9941P

### 【作者名】

キララ

### 【あらすじ】

あなたの願いと叶えます。

そのかわりに、あなたの寿命を下さい。

(前書き)

前回書いた、「あなたに願った僕の負け」  
での外伝です。

ただ、こちらだけでも物語は成立しているので  
前回のは読まなくても大丈夫です。

小説家希望の大学1年です。

厳しい感想が聞きたいのでよろしくお願いします。

20年前の話である。

小さな町で交通事故が起こった。

運転手の不注意で歩道へと突っ込んだ大型トラックはそこに居た、当時5歳の少女を空高く撥ねた。はずだった。

少女はトラックが突っ込んだと同時に、身体をふわりと空中へ浮かべそのまま一回転し、近くにあった電柱の上へと降り立った。怪我などない。

誰が見ても人技ではなかった。

しかし少女には己の身体を空中へ浮かべる力など無くましてや空を飛ぶ為の羽根も持っていない。

少女は紛れもなく人間なのだ。

少女が有名になるまで、そう時間は掛からなかった。

マスコミはこぞって少女を取り上げ

一部の宗教団体からは信仰の対象にまでされた。

人は少女を 神の子 と呼んだ。

少女は嬉しかった。

そういう年頃である。

だがそれも長くは続かず、 神の子 は時の人となった。

20年前の話である。

上司には口出しするな。それが社会に出て、最初に教わった事だと思う。だから私は金曜日の夜、正確には21時48分に、誰も居ないオフィスで上司に言われた事を言われたままこなししていた。少し違う事と言えば、横にある会社のパソコンで大音量で音楽を流している事だけだろう。それがいけないことだとは思わない。誰にし

てはいけないと言われたわけでもないし誰にしても良いと言われたわけでもない。もし私が誰も居ないオフィスで会社のパソコンから大音量で音楽を流してしてる事が、誰かに知られようと他人に迷惑がかかるわけでもない。せいぜい電気代ぐらいだろうか。それならば、私をこのように一人にさせた上司が悪い。とは思いつつも、私には言えないだろうな。上司には逆らっちゃだめだからね。

「相変わらず趣味の悪い音楽を聴きますなー 神の子 は」

「その呼び名、もうはやってないわよ。それとも何？あなたももしかしてタイムスリップして来ちゃったのかしら？」

「タイムスリップが出来るのであれば、俺は過去へ行きたいね。坂本龍馬が誰に殺されたか、非常に興味がある」

「徳川家康じゃないの？」

「お前って、引きこもりだったんだな」

いつの間にか神崎はオフィスに居た。部長の椅子に座り、くるくると楽しそうに回っている。

「部長に怒られても知らないわよ」

「お前が知っていても俺が怒られることには変わらない」

神崎は椅子から離れると、ふらふらしながら私の作業を見に来た。

「大変そうだねー。あとどれくらいで終わるの？」

「30分ぐらいよ。頭を使う作業じゃないから楽で助かるわ」

「ああ、馬鹿にしか出来ない作業か。俺には無理だ。あと4時間はかかるな」

「馬鹿にしか出来ない作業を4時間もかかる方が馬鹿だと思うけど。あれ？私、間違ってるないよね？」

「んにゃ。わかんねー」

神崎は私が作業を終わらせるまで待つているわけではないらしく帰るわー、と言いながらエレベーターホールへと向かった。

時刻はすでに22時を過ぎている。

「つか、何で戻って来たんだ？」

「そうそう、本当にさー、お前って空飛んだの？」

振り向きもせずと言った。

「何の話よ」

「神の子の話だよ。本人が目の前に居るんだから知りたいに決まってるじゃん」

「実際、私も良く覚えてないんだよ。まあ、電柱に付いていた防犯カメラにはくつきりと飛んだ私が写ってたみたいだから多分そうだと思う。つーか、何で私とその本人だつて知ってるのよ」

名前は伏せていたはず。母がそうさせたのだ。

「んにゃ。わかんねー」

絶対嘘だ。皆さん、この人、嘘ついていますよー。

「そもそも、何であんな小さな町に防犯カメラなんてあったんだ？いらねーだろ。あんな田舎」

「人の地元をあんまりひどく言わないで欲しいね。私が生まれた頃にな、通り魔事件が発生したのよ」

「それだけが理由だったら、お前の地元、すんげー金持ちじゃん」

「いや、それが最初の通り魔の犯人は捕まったんだけど、そのすぐ後に、また通り魔事件が」

「続けて2回も？」

「まあ、2回目も犯人は見つかったんだけど、その後もまた」

「呪われてんな、その町」

「うん。合計6回」

「そりゃーすぐさま防犯カメラ付けるわ」

神崎はくすつと笑っていたけれども、実際には笑える話ではない。

最後の犠牲者は確か私の母だった。とはいえ、私も気が付いたら笑っていた。昔から人が笑うとすぐにつられて笑ってしまう。神崎はまた来週ーつと言い残しエレベーターに乗って帰って行った。そしてまた、私は一人になった。

家に着いたのはちょうど23時半であった。駅から歩いて5分という素晴らしい場所で暮らしている事は、私のささやかな自慢話で

ある。家賃1カ月7万円のアパート。一人で暮らすには十分過ぎた。だからと言って、誰かと暮らしたわけではない。過去にした同棲でろくな思い出がないのは、当時の私が幼過ぎたのだと分かっている。思い出したくもない。

先に言っておこう。私は一人で暮らしている。

「あ、おかえりー」

独りじゃない。一人で暮らしているのだ。

「遅かったねー。先にお風呂入っちゃったー」

そりゃ、私は朝が苦手だ。出来れば、誰かに起こしてもらいたいとは思う。

「お腹すいたー。カップラーメンで良いから作ってー」

「カップラーメンが作れないって、今までどうやって21世紀を生きて来たんだよ」

生粹のお嬢様が、文字の読めない馬鹿しかいないだろうな。

そいつはうんうんと、嬉しそうに頷くとリビングから玄関に居る私の前まで歩いてきた。そいつ、というかこの女、今朝、起きたら私の布団の中に居たのである。ちなみに私には女と寝る趣味はない。家に入れた覚えもない。だから怖い。

「帰れって言ったよね。あー、もうあんたは何なのよ」

私は自分の髪の毛をくしゃくしゃする。思い通りにならない事があると、すぐにそうしてしまう。

「だーかーらー、言ったじゃないですかー。私はあなたの願いを叶える為に現れた、神なんですってー」

怪しい宗教団体かなんかだろう。と、思わせる事を言うが、私はこの女がそういう類のものでない事を良く分かっている。有り得ないのだ。この女、彼女には人間には無い、背中から羽根が生えているのだ。その羽根が本物だという証拠は朝の内に確認済みだ。気になつて女の服を脱がせてしまった。

思わず写メっちゃったもん。

背中から羽根が生えているんだぜ？

女は玄関に立つ私に向かって、自慢そうに己の持っている真っ白で大きな羽根を見せびらかせてきた。実際、私は羽根なんていらなかったところで生きているのに邪魔なだけだ。

人間、普通が一番。

そんな事より、私は女が持つ金色で長く、ウェーブがかった髪の毛の方が欲しい。ちょっと触ったら、すんごくふわふわしてるんだもん。いいなー。

「ちょっと、あんたが今着ている服、私の部屋着じゃないの？」  
しかも背中中の羽根に当たる部分、切ってやがる。

「だって私の着ていた服は、朝あなた様に破られちゃったわけですし。まさか裸で待っているわけにもいかないじゃないですかー。家に着いたら、裸の背中から羽根の生えた金髪の女が居るなんて、どんな少年漫画ですかー。まあ、あなた様が男性だったらそうしようかなーって思ったんですけど、女性ですからねー。やめましたー」  
「妥当な考えだと思うけど、なんだか悲しいわ」

そんなやりとりをし、私はようやく座ることが出来た。ちなみに今は12月。今年はこたつを出した。私がこたつへ入ると、女は向かい側に当たり前の様に腰を下ろした。私は朝から気になっていた事を聞いてみた。

「あんたさー、名前とかあんの？」

「んー。私達には名前がないんですよー。ターゲット、ああ、今の私にとつてのあなたが、うん、付けたりつけなかつたりーですかねー。大体のターゲットは私の事をやっぱり 神 もしくは 神様 っって呼びますよー」

「 神 か」

ん？今私達って言ったような。

「ね、あんた達って仲間とか居るの？」

「居ますよー。あんまり逢わないですけどねー」

だから呼び合う必要がない。名前がいらなんだよ。と女は言った。  
「じゃあ、付けてあげるよ」

「え！いいんですかー？」

女はうひゃーつと言いなから手を叩いた。今時、そんな喜び方をする人なんて居ないと思うぞ。

「私ね、こんな名前で呼ばれたって思っているのがあるんですよー」

「最初からあるのか。何？言ってるらん」

「あのねー、 犬夜叉」

どうやらさつきまでテレビアニメ犬夜叉の再放送を見ていたらしい。だめだそんなもん！

「なんで犬夜叉なのよ。せめて尻尾とかキララとかにきなさい」

ちなみに作家さんがキララなのは犬夜叉とは一切関係ない。

いや、本当に。

だって今思いついたもん。

「じゃあ、 犬夜叉 からとって やっちー ね」

「うわ、だつさ。マジ有り得ないんですけど」

カップラーメンも作れないやつにダサいと言われてしまった。

つーか、キャラ崩壊してるぞ。

とはいえ、私も結構崩壊している気がする。

人間は常に変化する生き物だからね。

「うっさい。 やっちー で決定ね。可愛いじゃない やっちー」

こいつが本当に 神 なのであれば、私は結構罰当たりな事をしていと思う。

やっちー（呼ばせてもらおう）は、やっちー、やっちーと自分の名前を小さく口にする、深い溜息とともに、まあいいかという顔をした。

「んで、あなた様はこの やっちー にどういった事をお願いするのですかー？」

やっちーは不貞腐れたような顔で私を見てきた。早く願い事を言うて下さいと言わんばかりに。

だから私は困る。

「んんとな。まあお願いなんてないんだよ。私さー、神頼みとか好きじゃないし」

「私の存在全否定ー！」

「ごめん、だから帰って」

「名前までつけておいて、帰れってちよつと酷過ぎませんかー！」  
「やっちーはこたつのテーブルを両手で叩いた。いちいちリアクションが古い。」

「じゃあ、願い事はいい。ゆっくりして行きなさい。さて、私はお風呂に入ろう」

私がこたつから出て、リビングの出口へと向かうと

「あのー、朝忙しそうで言わなかったんですけどー、実は私達の中ではルールがありましたー」  
と、やっちーが言ってきた。

「ん？願い事の代わりに寿命取るってやつでしょ？朝聞いたわよ」  
「やっちー達は願いを叶える代わりに寿命を取る。もちろん、その願い事の中身と寿命の長さは比例する。変わらずに生きるか、快適に生きて早く死ぬかである。」

「あ、あのー。それだけじゃなくてですねー」

「やっちーは私から視線をずらした。まるで好きな異性に告白をする前みたいに。」

「実はー、出逢って48時間内に願い事を言わないと、私はあなた様を殺さなくてはならないんですー」

「やっちーはえへつと苦笑いしながら言った。笑えねーよ。笑うな。」

「え、何？じゃあ私、あなたに願い事を叶えてもらわなくちゃいけないって事！」

「ええ。そういう事になりますー」

結局、私は目の前に居る彼女に願わなくてはならないらしい。  
本当、なんでこいつ、ここに来たんだ？

「今まであなたが叶えてきた願い事ってさー、どんなのがあったわ

け？」

お風呂から出た私は、こたつで爆睡中のやっちーを叩き起こした。他の人の願い事を参考にしてみるのも、悪くないと思う。意味があるから分らないが。

「んー。やっぱり多いのはお金関係ですかねー。金くれーとか、借金チャラにしてーとか」

やはりその類か。人間、生き方は人それぞれだか求める物は同じのようだ。

「ちなみに前回のターゲットは『ノーベル賞が欲しい』でしたねー」

「ちよつと待て。さすがにそれは無理だよな？」

嫌な予感がする。違うな。嫌な予感しかない。

「ちゃんと願いは叶えましたよー。だから次のノーベル賞には選ばれますー。ただですねー、さすがにノーベル賞だと寿命の方が高額でしたー。おそらく、授賞式の数日後にはお亡くなりになるのだと思いますよー」

やっちーは笑ったが、さすがに私は笑えなかった。

「寿命の交渉はちゃんとするって言ってたけど、本人は納得したって事よね？」

「当たり前じゃないですかー。私自身、おすすめはしなかったのですが、本人がどうしてもつと言いますものでー」

次のノーベル賞が楽しみになって来た。

「あとはー、恋人が欲しいとかも多いですよー。友達が欲しいってのもありますねー」

「それはやっちーが叶えられる願い事の中から言ってる？」

お金も恋人も友達も、神の力で叶えられてしまうモノなのだとしたら、それはどうなのだろう。魔法で叶う恋に意味なんてないという事を、現代人は少女漫画で学んでいないのだろうか。

「お金も恋人も友達も、やっちーは叶えてあげられますよー。やっちーが出来ない事は壊れたモノの修復ですな」

「つまり、喧嘩した恋人や友達は仲直り出来ないって事か」

やっちーの話では、壊したモノは本人が治すしかないらしい。壊れた友情も、薄れた愛情も、本人達次第でどうにかなるものだと言いたいのだ。築いてきた本人達が壊したのなら、作れないわけがない。そう、いう事だと思う。

「もしかして、修復して欲しい人間関係でもありましたー？」

やっちーが身体をこたつに乗り出して聞いてきた。こたつの上にある缶ビールを私側に寄せる必要はなさそうだ。

「ん？ないよ。私は人間関係に関しては、結構上手くやっている方だからね」

失敗からしか成功の秘訣を学べない人間が世界には居る。私はその分類に入るのだと思う。

「じゃあさー、死んだ者を生き返らせる事は？壊れたモノとは言え、本人次第での修復は無理なわけじゃない？だとすると、これこそ神の力が必要だと思っただけど」

「死んだモノを生き返らせる事は誰にも不可能ですよー？零から何かを生み出せるって考える人も居らっしゃいますが、そもそも、死んだモノは零じゃないー。現す事すら不可能なんですー」

つまりは無。

何も無い。

やっちーは当たり前前のようにそう言った。いや、当たり前前事を当たり前前に言っただけなのか。

私には生き返らせた人なんて居ない。本当に興味本位だった。

「ふーん。じゃあ病気で寿命何カ月の人を元気には出来ない？」

むろん、私には病人の知り合いは居ない。

「私からそのような人に出来る事は安楽死ぐらいですかねー」

「って事は、人を殺す事は出来るって話になるのか？」

「人なんていつ死ぬか分からないんですよー？それをただちょっといじるぐらい、私には朝飯前ですー」

嫌な事を聞いてしまった。

むろん、私には殺したい人が居るのである。

人を一人、殺して欲しい。

私がそう言っていると、やっちーは笑顔で頷いた。

「驚かないの？」

「驚いたりなんてしないですよー。あなたは自分に本音を言っただけなのでからー」

やっちーは言う。

私に向かって。

「私達はターゲットによって、姿を変え、自分を造りますー」

ターゲットが望んだままの 神 の姿にー。

ターゲットが望んだままの 自分 の中身にー。

やっちーは続ける。

「だから、今のやっちーはあなたが作りだした あなた なのですー。多くの人は 神 と聞くと、私のような天使みたいな姿を想像したりなんてしませんー。あなたはきっと、 神 も天使も仏も何もかも、一緒なのですー」

なぜ、私がやっちーのような性格を造ったのか分からない。私はやっちーのようになりたかったのだろうか。今までの話ではそのようになってしまう。

違う。

私の中に、やっちーは居た。

20年前から、私とやっちーはすでに出逢っていた。

そして20年前に私の母が亡くなった。

私は全てを理解した。

「あなたの願いを叶えますー」

死因はやっちーに任せる事にした。希望する事も出来たが、そこまでは考えたくなかった。

「あと2つ。ねえ、知り得ない事を、知ることは出来る？」

「出来るですよー。何かありましたー？」

「うーん。例えばさー、坂本龍馬を殺したのは誰かーとか？」

ノーベル賞受賞が可能なら、これぐらい出来るはずである。やっちーは、ちよつと待って下さいーと言いなから、頭を振った。これで過去が分かるのだろうか。

「分かりましたー。この人ですー」

やっちーは近くにあった広告の白紙部分に名前を書いた。

「え、ちよつと待って。これ本当？」

やっちーは興味が無いようで、そうですよーと適当に言っつて私のビールを飲んだ。知ってしまった。私は歴史の人物を良く知らないが、多分有名な人なのだろう。

神崎に教えてあげよう。

私は携帯電話で神崎にメールを送った。神崎の事だから、返信は早いに決まっている。返すのが面倒なのですぐに電源を切つてベッドに投げた。今頃どんな表情をしているのだろうか。

「ちなみに今の寿命は13分ぐらいですかねー」

歴史の大発見などは、人間の寿命に換算するとその程度らしい。ちなみに、人を殺すとの寿命の換算は聞いていない。明日死のうと、私にはどうでも良かった。だからやっちーには言わないでもらったのだった。

「あとひとつですがー、どうされますかー？」

飽きてきたのか、やっちーの瞼は半分も開いていない。

最後の願いはやっちーの存在を知つて最初に思つた事だった。

これで最後にしよう。

私は自分勝手に私を救いたい。

「私の記憶から、やっちーの記憶と殺して欲しい人との記憶を消して欲しい」

やっちーはただ頷いた。

それから私達はずっと話していた。話題性もないぐらいにくだらない話だった。世間話もした。お互いの初恋の話もした。最近怒

った事や、笑い話。テレビをつけて、深夜番組を見ながら2人で突っ込んでみたり、たまたま借りていた映画のDVDを見たりもした。お酒が入るとやっちは脱ぐ癖があるのも知った。

私为一体、どれぐらいの寿命を取られたのか、聞かなかった。やっちは言わなくては交渉にならないと慌てたが、交渉相手の私がそれを拒んだのだから、気にすることないと言い返した。私が殺したい相手なんて、もう何年も逢っていないのだから生きているかも分からない。だから願いは無駄なのかもしれない。それでも願う事で自分自身すつきりした。だから良かった。

「いつ、私から寿命を取るの？」

「そうですねー、まああなたが寝たらにしますよー。そしたら私も出て行きますよー。起きたらあなたはきつと私の事を忘れていきますよー」

そして今日の事もー。

やっちは付け足した。私の中で今日はなかった事になるが、世界はそれを許さない。たった一人の人間が死んでも、その人間が生きた証は消えないのだから。

過去は永遠に消えない。  
消せない。

いくら 神 に頼んだとしても、終わらない。

気が付いたら私は寝ていた。

遅寝早起き程身体に悪いものはないと思う。私は起き上がり、時計を見ると時刻はすでに16時であった。どうせ明日も休みなので慌てる必要はない。私はキッチンへ行き水を飲んだ。目覚めの一杯は身体に良いらしい。この時間では何かをする気にもなれず、私は昨夜を共にした携帯電話を見た。実際、起きた原因は背中から携帯電話を踏んだ痛みだったらしい。電源は消えている。着信で起こされるのは本当に嫌いだ。

「うわっ」

さすがに声が出た。着信履歴一杯に神崎の名前があり、受信ボックスには神崎からのメールが50通を超えている。

「本当、面倒なやつ」

私は返信メールを送り、そしてすぐに電源を切りその辺に投げた。

んにゃ、わかんねー

(後書き)

感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9941p/>

---

昨日は終わらない

2011年1月10日20時20分発行